



● 資料紹介

「大日本六十餘州の内、豊後緒方の鼻祖、華の本」

本絵は、江戸時代後期の歌川派を代表する浮世絵師国芳(1797～1861)が、平安時代末にその活躍ぶりから歴史上に名をとどめる豊後国の武士、緒方惟栄を描いた作品です。『源平盛衰記』には、惟栄は姫嶽大明神という蛇神(大蛇)と「花御本」(本絵では「華の本」という娘との間に生まれた「大太童」(大太童)の末裔とあり(『平家物語』では、大蛇は高千穂明神の化身となっています)、この伝説が作品のモチーフになっています。

作者の国芳は、文政年間末「水滸伝」を題材にした錦絵で人気を博し、以後武者絵・風刺画・風景画戯画などを描いてその異才を発揮しました。嘉永6年(1853)の評判記では役者絵の国貞(1786～1864)武者絵の国芳、風景画の広重(1797～1858)といわれており、三人で歌川派の隆盛を築いたとも評価されています。

江戸日本橋の染物屋に育った国芳は、衣装のデザインにも凝ったといい、本絵の細やかな衣装描写はそうした国芳の作風をよく伝えています。なお、改印や「芳桐印」の落款から、弘化元～4年(1844～47)頃の作品と考えられます。

紙本多色摺 縦35.5×横24.6cm



● 行事案内

テーマ展示

■ 第2回 下郡遺跡展

期間 10年7月4日(土)～9月27日(日)

内容 下郡遺跡は、弥生時代の環濠集落跡や古代の大型掘立柱建物・道路跡など、多くの貴重な遺構や遺物が発見され、話題をよんだ遺跡です。今回は、ここ10年間の発掘調査の成果をまとめて紹介します。

各種講座

■ ふるさと歴史再発見「考古のコース」

期間 7月～9月の第1・2・3土曜日

対象 高校生以上

■ ジュニア歴史講座

期間 8月5・6・7日 13:30～16:30

対象 小・中学生

内容 本物の資料に触ったり、実験をとおして歴史に親しむ講座です。

● 編集後記

テーマ展でこれでもかと並べた古文書の数々。ほとんどの人が、まず洩らす感想は「昔の人はみな字が上手かったんじゃ」。どうやら大友宗麟など本人が書いたと勘違いしている様子で

す。解説に「大友宗麟が誰それに出した手紙」とあれば、誤解するのも無理はないか。古文書がどうやって出来るのか、説明をつけるべきだったと後悔しています。(H.O)

資料館ニュース No.43

発行 1998.6.30

大分市歴史資料館

大分市大字国分960番地の1
〒870-0864 ☎(097)549-0880



蛇の目紋付き食籠

ふるさとの歴史再発見・歴史のコース

資料館では、教育普及活動の一環として毎年「ふるさとの歴史再発見」という郷土史講座を開催しています。この講座は歴史・考古・民俗・古文書の4コースに分かれており、各コース3ヵ月（民俗は2ヵ月）、毎月第1・2・3土曜日の計9回（民俗は6回）行なっています。昨年度はのべ2400人をこえる参加があり、教育普及活動の大きな柱になっています。今年度も、4月に歴史のコースから開講し、考古・民俗・古文書の順で実施する予定です。

この講座の特徴は、継続して受講される方が多いことです。今年度の歴史のコースでは応募者106名のうち、78名が昨年も同コースを受講した人、さらに一昨年から継続している人が56名と半数をこえています。中には開館以来11年間4コースとも欠かさず受講している人も数名います。そのため内容がマンネリにならないように、歴史では統一テーマを多方面から講義したり、考古では最新発掘情報を紹介するなど、工夫しています。県外講師による特別講演もそのひとつです。今後も受講者の期待に添うよう、充実した講座を企画したいと思っています。



中野氏による特別講演

歴史のコース日程表

回数	講師	テーマ
1回	武富雅宣（歴史資料館）	江戸時代の祇園八幡宮の社家について
2回	長田弘通（ " ）	中世における祇園八幡宮と政治権力
3回	長野浩典氏（大分東明高校教諭）	大分県における氏子調の展開
4回	鹿毛敏夫氏（先哲史料館研究員）	大友時代の大分を歩く
5回	飯沼賢司氏（別府大学教授）	鎮西国家の神「八幡」の成立
6回	小泊立矢氏（先哲史料館副館長）	豊後国における時宗の展開
7回	大津祐司氏（ " 主任研究員）	佐伯のキリシタン
8回	佐藤晃洋氏（情報科高校教諭）	広瀬久兵衛と府内藩政改革
9回	中野 等氏（九州大学助教授）	特別講演「豊臣期における九州と豊後」

●表紙紹介

じゃめもんつじきろう 蛇の目紋付き食籠

蓋の中央に「蛇の目」紋を金蒔絵であしらった食物を入れる容器で、宴会や食物を贈るときに使うほか、座敷の装飾品としても使用されます。

「蛇の目」紋は江戸時代初期に熊本藩主となった加藤家の家紋です。加藤清正は、瀬戸内海への通路を確保するため、特に幕府に願ひ出て鶴崎を拝領しました。本食籠は、おそらく加藤氏が鶴崎在住の藩士に与えた品でしょう。鶴崎には、細川氏藩主時代の資料はよく残っていますが、加藤氏時代のものは少なく、本食籠は加藤氏と鶴崎の関係を語る貴重な資料です。 寄贈者 竹内 豊氏



高崎城と市内の山城(6) 守岡城

現在森岡小学校のある場所は、守岡城の跡です。江戸時代の地誌書『豊後国志』には「守岡堡、在津守郷曲村」、「大分郡志」には「城山 在于津守西南。大伴氏ノ城蹟也」と書かれています。中世の記録はなく、詳細は不明ですが、曲の地頭勾一族の居城と推定されています。いずれにしても、府内を守る防衛ラインの一角を占めています。

城は標高約63mのL字状をした独立丘陵上にあり、東側中腹には鎌倉から室町時代の作とされる曲石仏があります。また、周囲中腹には多数の横穴墓が存在します。

1976・77年、森岡小学校建設のため、現在のグラウンドの一部が、大分市教育委員会によって発掘調査されました。発掘地点は城の二ノ郭ともいえる部分で、本郭と推定される部分は、学校敷地の南側にある若干高い部分です。

本郭は、学校敷地となった二ノ郭より高く、丘陵の最も高い場所に位置します。学校敷地東側、現在上水道貯水槽がある地点も若干高く、別の郭となる可能性があります。二ノ郭の東側から本郭東、南側と西側一部に堀の痕跡が認められ、本郭の東南隅には張り出しをもっています。周囲に堀をもつ構造の小規模山城は以前紹介した金谷迫丸山城や宇佐市光岡城などで認められています。ただ、守岡城の場合、堀が全周しておらず、堀跡も痕跡的なので帯郭の可能性もあります。東南部の張り出しの様な遺構は、金谷迫丸山城では明確ではありませんが、光岡城では認められます。張り出しは、敵の攻撃に対して側面から矢を射ることができるようにした施設で、近世城郭では多用され、多くの階層石垣は石垣ラインからはみ出しています。

発掘調査の成果は概報のみで、詳細は不明ですが、掘立建物跡や溝、柵列が検出されており、居館建物跡と考えられています。溝は断面V字形（葉研堀）で、南北方向や東西方向に見つかっています。施設

を区画する溝ですが、全体のまとまりはよくわかりません。柵列は郭内部を南北約45m東西約32+αmの方形に区画しています。検出された掘立建物群はこの方形区画内部と外側にも広がっています。

遺物には、明代の中国製青磁や室町時代後半の焼き物のほか、それらとともに手捏の京都系かわらけ（非ロクロ系土師器皿）が多数出土しています。この土器は、九州では豊後国に特徴的に見られる土師器皿で、大友氏との関係が指摘されている土器です。



守岡城跡地形図

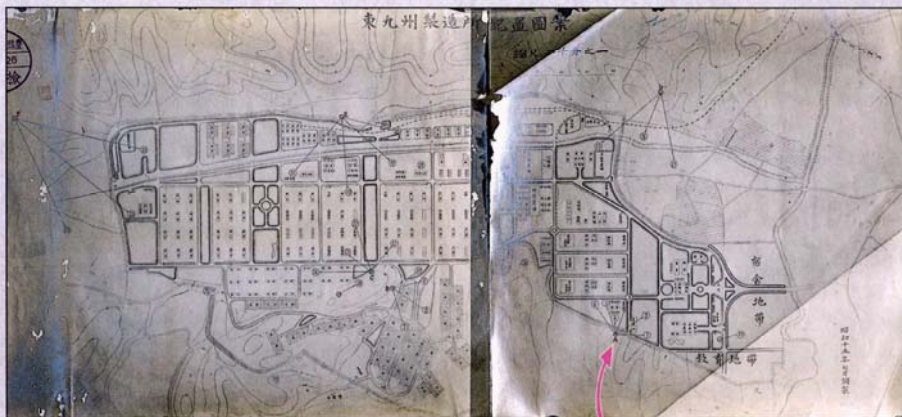
ありし日の坂ノ市



昭和15年の風景



現在の風景



「東九州製造所配置図案」

A地点

陸軍造兵廠と坂ノ市

4月に別府市在住の末松節子氏から「昭和十五年十一月現在 大分出張所敷地全影」と題する1冊の写真帳を寄贈していただきました。この写真帳は坂ノ市地区に建設された東京第二陸軍造兵廠火薬製造工場の予定地を6地点から撮影したものです。末松氏の父保田喜雄氏がこの製造所の初代所長を勤めていた関係で末松氏の手元に残されたとのこと。坂ノ市製造所の敷地は、現在、その主要な部分が旭化成大分工場となっています。

写真帳の1ページ目には「東九州製造所配置図案」があり、建設される工場施設の配置が描かれています。この配置図には、周辺の台地上にA～Fの記号が付けられています。この記号は後に綴られた建設予定地の撮影場所を示しています。資料館では、これら撮影地点を特定し、同じ地点で現況写真を撮影し、58年前の写真と比較することにしました。しかし地図と現地調査により6カ所の撮影地点はほぼ特定できたのですが、すでに数になっていたり、現在も旭化成大分工場の敷地内であったりして、同じ地点で撮影することはできませんでした。そこでその近くで撮影可能な場所を選び、3カ所(A・B・D地点)で現況写真を撮影しました。上に掲載した写真はA地点、坂ノ市地区南側、大字屋山の丘陵端からほぼ建設予定地を望んだ写真です。製造所建設以前は人家のまばらな田園地帯でした。この田園は工場建設と同時に失われ風景が一変したことでしょう。それにもまして、現在は工場周辺にも人家が密集し、特に、昔の写真では遠くに見える中心部が撮影地点間際まで広がっているなど、約60年の間に大きく変貌したことがわかります。

今回寄贈いただいた写真帳からは、陸軍製造所自体のことはあまりわかりませんが、建設以前の坂ノ市地区の風景を教えてくれる貴重な資料といえます。

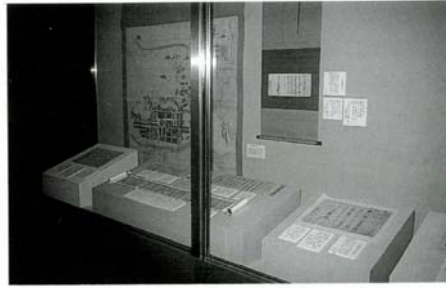
◎テーマ展示 I

「文字が語る大分の歴史－館蔵古文書より－」

本テーマ展示は、これまでに当館が収集した古文書を展示し、そこに記録された郷土大分の様々な歴史をご覧いただくこと企画したものです。古文書一つひとつに記された歴史と共に、それらから伺える当時の社会の動きや有様についても紹介してみました。ここでは、その展示内容のいくつかを紹介してみることにしましょう。

源頼朝書状 この書状は、現在、毛利空桑記念館文書の一つとして収められているもので、これまで写と考えられていた史料です。それが、昨年度、東京大学史料編纂所の調査によって、正文（本物）にほぼ間違いのないとの指摘がなされました。文書の真偽を検討された編纂所の本郷和人氏によれば、数少ない頼朝文書の正文（現在確認されているもので30通余）の中で、本文書の筆跡と実に良く似たものがあり、同一人物（頼朝の右筆で知られる平盛時）の手によるものと考えられること、そして互いに全く伝来を異にする（本文書は後述のように後白河上皇に宛てられ、もう一方は東大寺に宛てられている）ことから、共に正文である可能性は高い、と述べられています。本文書は宛名を欠いていますが、他の事例から、後白河上皇に宛てた書状とみられ、また源行家補縛の記事から、文治2年（1186）に書かれたものと推察されています。書状では「丹後国山庄」の住人の為重・永遠の逮捕を依頼された頼朝が、その適任者として家人の北条時定（時政の甥、又は従弟とも）を上皇に推挙した内容が書かれています。

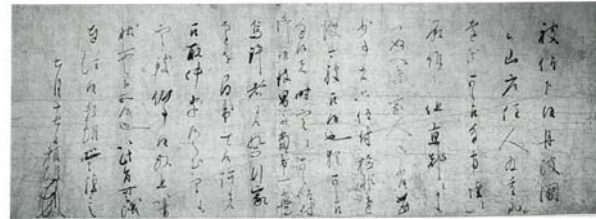
ところで本文書は、明治20年当時、大友家庶流の



松野家に所蔵されており、かつて頼朝の子孫を称した大友氏が入手したものと考えられています。その頃、大分町で大友家祖霊社建設の計画がもちあがり、その宝物とするため、先祖伝来の宝物・古文書類が松野家から一時当地に預けられることになりました。結局神社は造られず、本文書を含めた資料の一部は毛利空桑家の所有するところとなり、その後、毛利家により大分市に寄贈され、今日これらは市教育委員会の所有となっています。本来当地に伝来されるはずのない本文書も、こうした経緯からみると、大分の歴史と深い関わりをもった史料であるといえます。

大友宗麟書状 大友宗麟から「三老」の一人、臼杵鑑速へ宛てた書状で、宗麟の花押や織田信長の伊勢進攻の記事から、永祿12年（1569）11月5日に出されたものとみられます。この年11月21日、大友氏は、毛利氏の守る筑前立花城を開城させ、豊前・筑前からその勢力を撤退させることに成功しており、冒頭

の「御大利（大勝利）」は、こうした戦況を述べた



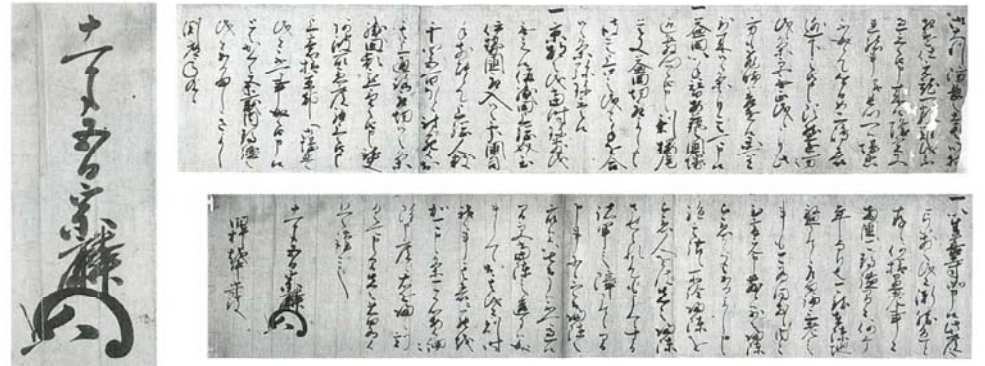
源頼朝書状

書下
 御下候丹後國
 □山庄住人為重・水
 遠等召等、可合召進事、謹以
 承候了、但京都にさまも
 候へべき家人も不候候、此如
 少事者、只御付候非違
 使、可被召候也、猶可合召
 進候者、時定に可合御付
 御候、彼男不当第一不覚
 鳥許者に候、然而行家
 などを尋出て候許に候、
 召取件候はは問も
 定致辭事候、且以書
 状所合下知候也、以此旨可合渡
 達給候、頼朝怒々謹言
 七月七日 頼朝（花押）

ものといえます。毛利氏の敗色をみて、石見の益田氏が「上口の儀」（備後の藤井一党のことか）と手をわせて芸安の国境へ侵攻し、当時毛利元就の四男穂田元清が守る桜尾城を奪取したことや、信長が「上通路」を手に入れるために伊勢国司北畠具教と戦って手勢千四百ほどを討死にさせたこと、またこの信長に対する京都の動きや情勢なども記されており、宗麟が実に多方面にわたって情報収集を行っていたことが分かります。また、ここで宗麟は、豊前筑前の両国を手中にするまでは「何ヶ年なり共、在陣致すべき」考えのあることを述べており、帰陣衆については「六七百人を超えてはならないとするなど、この毛利氏との一戦によせる彼の意気込みの程がうかがえます。しかし、一方で「前々帰陣を急がる方もあるよし」とあるように、従軍した国衆の

中には長期にわたる出陣で厭戦の気分が高まっていたこともわかります。

府内藩記録 掲載の史料は、文化8年（1811）の府内藩の『万留記』に書き留められたもので、同年11月18日夜から起きた岡藩領内の百姓一揆（「文化一揆」）に対して、府内藩が鉄砲頭領の河合久内をはじめ、「百人程」の兵員を準備した内容が記されています。脇田室の著した『党民流説』には「四隣の諸藩此変乱におどろき、界を犯すこともあやぶみ、ひそかに意を用ひ、又使者も立らる々よしなりしを、岡藩より堅く辞せられてやみしぞ、府内は足軽百人を備え、臼杵は人数四百五十人を命せられしなどかたり伝ふ」とあります。本史料は、この時の兵員を具体的に記したもので、『党民流説』の記述を裏付ける内容として注目されます。



▲ ▼ 大友宗麟書状

書下
 御大利 防長之者共、同様
 相違仕、元就一類無儀、不
 過之申来候、降夷文
 連絡事、長門一ヶ旗忍
 不成候、近日常如備表
 議下之申候、雖、遠方之
 儀、更無正儀、此方之
 儀、更無正儀、必可有
 方も飛脚空遣候、可有
 到来候之案、自是可合
 益田以手候、安芸之國境
 迄免向之申候、制取尾
 是又益田切取よし申候、
 彼是上口之儀も手を合
 候之案、致珍重候
 京都之儀、當時珍敷儀
 無之候、併織田上程合
 伊勢国取入候、因可司
 手前能候て、上程人数
 千四五百取と討死候、於
 其上通路取切候之案、
 織田頼朝之由申候、就夫
 阿波荒急度能上之由申候、
 上意殊京都へ御稟忍之
 儀も、不可成候之由申候
 ともかくも五畿内静忍之
 儀、あるまじきよし
 酒底承及候

書下
 一、以生善寺如申候、此度之
 弓前之儀者、漸静色と
 存候、何様感事者
 面国可静感問者、何ヶ
 年なり共、可致在陣地
 事にて候、乍勿論三老之
 事も可為同前候、内々
 至受元申候、前々帰陣
 被公かたも申候、
 絶言語候、所説、帰陣
 させられ候て、よく候する
 諸軍之際にて候間、
 申事宗麟、定由端備
 乘へ、六七百人ハ不可過候
 間、更進陣之適にハ成
 我々事、於三罷應
 加可申候案、可頼心安候、細々
 歸陣度候、右近短候、
 且申候間、先々皆略候、
 恐々謹言、
 十一月五日 宗麟（花押）
 臼杵越中守殿

▼ 府内藩記録

全十八日
 一、岡藩領内一ヶ旗隊、此度、左
 之通藩領内各所、百姓一揆、何
 等にも難儀候、兵衛町有難儀、支配
 方へ申候
 二、山庄内
 三、御下候、一、御下候、
 四、御下候、
 五、御下候、
 六、御下候、
 七、御下候、
 八、御下候、
 九、御下候、
 十、御下候、
 十一、御下候、
 十二、御下候、
 十三、御下候、
 十四、御下候、
 十五、御下候、
 十六、御下候、
 十七、御下候、
 十八、御下候、
 右の外、武庫備具其儀、御下候